Title	「日本語予備課程」の歩み
Author(s)	棚橋, 明美
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.1, 2013.9 : 2-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4594
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

「日本語予備課程」の歩み

棚橋　明美

はじめに

2010年に筆者が聖学院大学「予備課程」のコーディネーターに着任してから３年が経過した(2013年３月末日現在)。そこで、これを１つの区切りと捉え、これまでの予備課程の歩みを総括し、今後の進むべき道を探ってみたい。

１．歴史

「日本語予備課程」の創設は2008年に遡る。その数年前から、欧米文化学科にそれ以前とは異質な留学生が入学するようになっていた。彼らは非漢字圏出身で、通常の授業について行くには日本語力（特に読み書きの力）が足りないものの、英語力や口頭表現能力など他に補える能力・特性を持ち、また、周囲の日本人学生に異文化への興味・関心を喚起する存在であるようだった。欧米文化学科は学科として独自に、彼らに対する日本語教育を補習形式で行っていたが、2008年４月、「基礎総合教育部」の下に学部・学科の枠を外した「日本語予備課程」が設置され、第一期生が受け入れられた。この時は､非漢字圏に限定しなかったため、中国出身で一般入学レベルに達しない者も含まれていた。また、コース選択受験だったため、通常課程合格レベルの学生も含まれていた。

しかし、その後、様々な問題点が明らかになり[1)]、改善が重ねられ[2)]、対象を非漢字圏出身者のみに絞り、いわば「新予備課程」とも呼ぶべきコースに整備された。筆者の着任は、そのような恵まれた状況下であった。

２．学生の様子

ここで、客観的な筆記テストが中心の入学試験では合格できなかったかもしれないレベルの日本語力からスタートした予備課程生たちの、入学後の様子を報告したい。

2-1　2010年度生

「新予備課程」は、T女（ミャンマー)、L男（スリランカ)、D男（スリランカ)、Y男（マレーシア)、F女（韓国）の５名に、前年度進級できなかったM男（ベトナム)[3)]を加えた６名でスタートした。学生の活躍（紙面の都合上、特記すべき学生についてのみ）を、以下に記す。

T女：2010年留学生日本語弁論大会（学内）において学長賞（最優秀賞）受賞、2011年第52回「外国人による日本語弁論大会」(日本語教育振興会・国際交流基金共催）において文部科学大臣賞受賞(このコンテストの様子とインタビューはNHK教育テレビにて放映された)。2012年度より国際ロータリークラブ「米山奨学金」を受け、アルバイトを減らして学業に励んでいる。

Y男：2011年秋学期、学内成績優秀者学費減免を獲得することができた。

なお、この年度から、日本語教師養成課程を履修中の学生が授業の一環として予備課程の授業見学に訪れ、そのうちの一部の学生はここで教壇実習を行った。

2-2　2011年度生

R女（ベトナム)､B女（ベナン)､T男（ベトナム）の３名に、前年度進級できなかったD男を加えた４名でスタートした。秋学期D男が進級で抜け、韓国からの交換留学生Ｈ女が１名加わった。この年度から、ECA科目が各学期２単位ずつ履修できるようになった。(資料１「2011年度時間割」参照)。これにより、一般学生との交流の機会も得られ、クラスの雰囲気がより開放感のあるものとなった。また、2010年生はまだ僅かながら被差別感を感じているように見受けられたが、2011年度生は、自分たちが大学から特に手厚い教育を受けていることを自覚し、誇りに思い、それに報いるためには異文化交流に積極的な役割を果たすべきだと感じていたようである。クラス単位で[4)]ヴェリタス祭

に出店し、母国の飲食物を作って販売し、好評を得た。学生個々の活躍は、以下の通りである。

B女：2011年留学生日本語弁論大会（学内）に於いて日本語教育委員長賞（第２位）受賞。

R女：同大会予選通過、本選出場。さらに2013年さいたま市外国人による日本語弁論大会の予選を通過、本選出場を果たした。スピーチの様子やインタビューは、ケーブルテレビJcomにおいて放映された。

2-3　2012年度生

予備課程入学の学生はC男（タイ）１名のみであったが、春学期は交換留学生D女（アメリカ）とK男（韓国）が部分的に予備課程科目を履修することで、３名、２名または１名のクラスとなり、秋学期には新たな交換留学生Ａ男（韓国）が来日して部分的に履修したため、２名または１名のクラスで、きめ細やかな指導を行うことができた。

この年度から、日本語教員養成課程では授業見学をやめ､代わりに課程履修者をクラスボランティアとして予備課程授業に能動的に組み込んだ。この試みは、予備課程・教師養成課程の双方に大変大きな効果をもたらした[5]。

３．非漢字圏学習者の日本語学習

これまでのところ、日本国内における日本語学校では、中国からの留学生が圧倒的に多い。彼らはもちろん日本語の漢字学習に圧倒的なアドバンテージを持ち、また互いに分からないところを母語で教え合いながら学習を進めて行くことができるが、少数派の非漢字圏出身者は、その中にあって進度について行けず、落ちこぼれてしまう例も少なくない。しかし、漢字学習を中心としたカリキュラムのもと、丁寧な少数教育を施せば、かなりの伸びが期待できるのではないだろうか。実際、上で述べたように、予備課程の学生達の入学後の成長・活躍はめざましい。

幸い、新予備課程は、旧予備課程に関わった方々が試行錯誤しながら懸命に築いて下さった土台の上に、現在の充実したシステムを作ることができ、さらに毎年改良を重ねている。また、このコースを簡潔に説明するパンフレットが欧米文化学科により作成された（資料２「欧米文化学科の留学生教育」参照)。

４．未来への提言――結びにかえて――

日本との関係が今後ますます深まると予測されるアジア・アフリカ圏からの留学生を積極的に呼び込み、本学をより国際的に開かれた環境にすることは、この厳しい時代における大学の生き残りにとって必須であろう。そのためには、予備課程の存在を国内外に広く知らしめることが効果的であるに違いない。

予備課程は別科[6]と一見似ているようだが、学部の中に位置づけられた、他大学に例を見ないユニークなシステムである。このコースを聖学院大学における留学生教育の１つの「特色」として位置づけ、非漢字圏出身の学生の安定的確保に取り組み[7]、また、海外の提携大学からの交換留学生受け入れの場としても活用し、日本語教員養成課程との連携もさらに深め、現在外部の日本語学校に委託している教壇実習もここで行える方向を目指したい。そして、将来的には留学生センターを設置し、学内の留学生教育をそこに一本化できれば、より理想的な留学生施策ができるのではないだろうか。

脚注

1）当時の予備課程は、１学期に予備課程用の特別日本語科目のみ14コマ履修するものの､単位認定はなされなかった。したがって、一般の留学生が１年次の秋学期から受益できる授業料減免特典は一定単位数の履修を条件とするため、予備課程生には２年次の秋学期からしか資格が発生せず、経済的な不公平感が学生の中に生じていた。また､｢入試の成績が低かった者を特訓して追いつかせる｣というコンセプトもあったため、学生達は被差別感とコ

ンプレックスを感じていたようだ。

2）2010年度生より、履修した14コマを７単位として認定することになった（2008年度生まで遡って適用）。授業料減免申請手続きに於いては、これを14単位とカウントし、一般留学生と同様の資格を得ることができるようになった。他にも、予備課程在籍中に「Jテスト」（日本語検定試験の１つ）に於いて要求水準を満たした認定証を獲得した場合、それを単位認定するなど、４年間で卒業できるためのバックアップ体制を整えた。また、予備課程生は全員、欧米文化学科所属とした。

3）予備課程を無事修了し、進級が確定したものの、妻の出産を機に帰国してしまい、退学。

4）上級生やボランティア学生の協力に負うところも大きかった。

5）授業外で学習をサポートする個人チューターも取り入れた。クラスボランティアの様子は、『2012年度日本語教員養成課程　日本語教育実習の記録』p３（宇都依花）で報告され、『緑聖文化』第11号（2013）pp. 105-106に転載された。

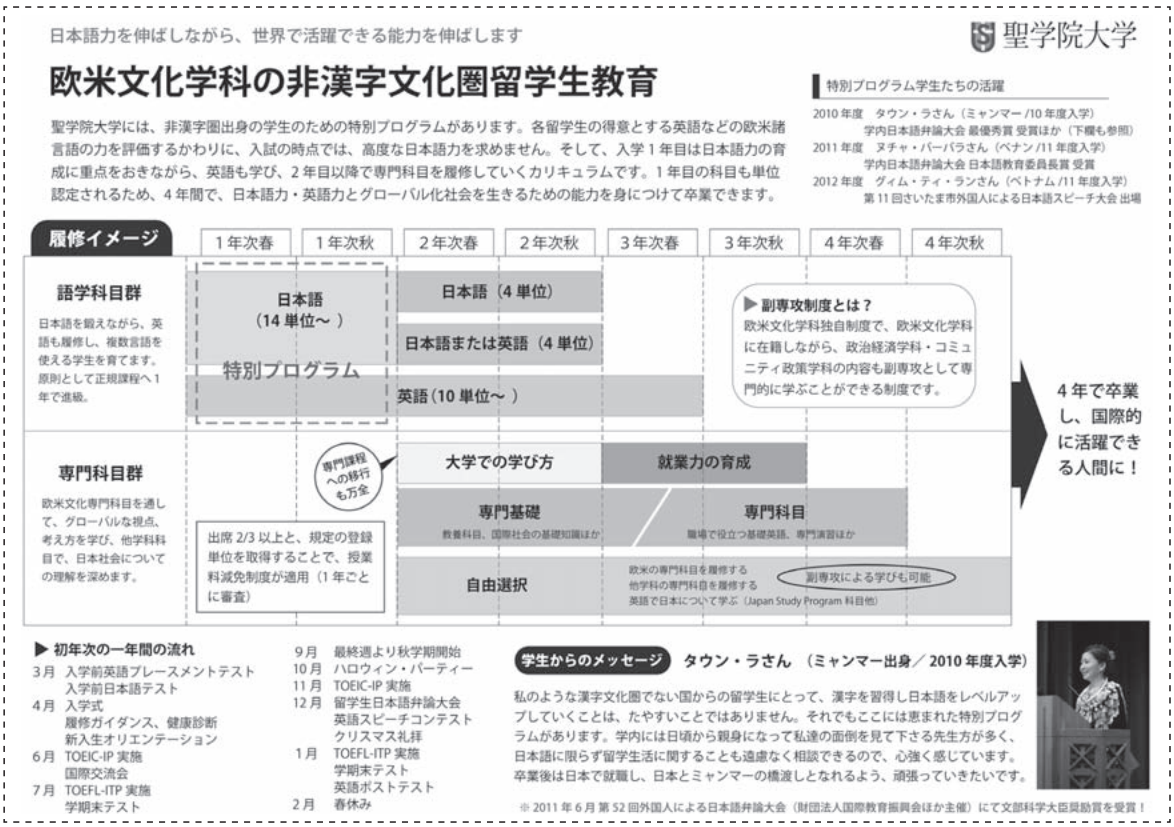
6）「別科」とは、一般に大学付属の日本語学校を指す。その大学への進学には一定の条件が必要。他大学受験も可。日本語学校なので、そこで学んだ日本語は、当然大学の単位としてカウントされることはない。

7）今後はタイなどの東南アジア諸国での現地入試も視野に入れる必要があるだろう。

資料１「予備課程時間割　2011年度春学期時間割」

	月	火	水	木	金
1					
2	基本漢字	基本漢字	アセンブリー・アワー	応用漢字	基本漢字
3	表現法	メイン・テキスト	メイン・テキスト	メイン・テキスト	文法
4	メイン・テキスト	英語	表現法	メイン・テキスト	英語
5	スキル		表現法		

資料２「欧米文化学科の非漢字圏留学生教育」（佐藤啓介准教授　作成）



（たなはし・あけみ　基礎総合教育部特任講師（日本語））